

# 中国禅宗建築史における 「天王殿」の位置づけ

佐々木 日嘉里

## 1. 本研究の目的

江戸時代初期、中国の萬福寺を範として隠元禅師が日本に建立した黄檗宗萬福寺には「天王殿」と呼ばれる堂宇がある。萬福寺の天王殿は寛文八年（1668）の建立で、桁行五間、梁間三間、一重、入母屋造、本瓦葺、前面一間通りを吹放しとする小堂である。内部には、弥勒菩薩の化身と言われる布袋像と韋駄天像が背中合わせに祀られており、両脇に二体ずつに分れて四天王像が配置されている。

ところで日本において上記のような「天王殿」と呼ばれる堂宇は、黄檗宗寺院以外には存在せず、その一方で、中国ではどの寺院にも中軸線上に並ぶ中心伽藍の一つとして組み込まれている。黄檗宗以外の禅宗寺院に天王殿が存在しなかった理由として、日本が禅宗を取り入れた当時、南宋時代の中国禅宗寺院には天王殿が存在しなかったことが考えられる。このことが明らかであるならば、中国では、天王殿はいつ成立したのであろうか。

本研究は、「天王殿」が独立した堂建築として伽藍の構成要素の一つに組み込まれた時期を明確にすることを目的とする。時期の明確化により「天王殿」が弥勒菩薩としての布袋像と韋駄天を共に祀る、独立した堂建築として成立した要因を探る第一段階となるからである。

そこで、存在が明らかな中華民国の時代から順次遡り種々の史料から「天王殿」の語の存在に関し検討することとする。

## 2. 中華民国、清代、明末期における「天王殿」の存在

清末から中華民国にかけ、伊東忠太や関野貞、常盤大定といった日本人の建築史家たちにより中国寺院建築の調査が行われた。伊東忠太の「北清建築調査報告」「満州の佛寺建築」には清末期の仏教寺院の写真や図面が収められ、天王殿の仏像、建立年代なども調査されているが、それらの寺院中、十四ヶ寺において天王殿の造営時期が明、清代であったことが記されている<sup>(1)</sup>。

また関野貞、常盤大定の『支那文化史蹟』には、清末から中華民国初期にかけての十四省にも亘る地域を踏査して撮った寺院や文化遺跡の写真や図、そして詳細な説明文が記されている。これらの調査研究の結果、ほとんどの寺院において、天王殿が中心伽藍のひとつに組み込まれ、その堂の構成は、萬福寺天王殿と同様、弥勒の化身として布袋、背中合わせに韋馱天、両脇に四天王を祀る形式が殆どであったことが明らかにされている<sup>(2)</sup>。

以上の調査結果から、中華民国の時代には明代から清代にかけて建立された天王殿が数多く存在していた状況が確認できる。

また、中華民国の時代に編纂された寺志には明、清の時代に天王殿が重修されたことが記されこれらの史料から、明代から清代に亘り天王殿の存在が中国全体に一般的であったことは明らかである。そのため、各時代のより詳細な状況を清代から順次確認していく。

まず明代末期も含む清代の状況を確認する。前述した黄檗宗大本山萬福寺は江戸時代初期、寛文元年(1661)に中国僧である隠元隆琦を開山として建てられた禅宗寺院である。隠元は中国萬福寺の住持であった十六年間に倭寇によって灰塵に帰した伽藍の復興に努め、齋堂・鐘鼓楼・山門・庫裡・寮舎等を重修した<sup>(4)</sup>。これらの経験から、日本において中国萬福寺を再現し、明禅を広めることを念頭に置いたのであろう。自身が住持した中国福建省福州にある黄檗山萬福寺の名をそのまま名付けたのである。さらに来日に際し大工棟梁を同伴させ、この棟梁が萬福寺建立に関わったことで、萬福寺は中国の寺院建築の影響を強

く受けるに至ったのである。<sup>(5)</sup> 中国の明末清初期の寺院の影響を伝える萬福寺の伽藍構成に天王殿が含まれていることは、すなわち中国萬福寺に天王殿が存在していたことを意味し、明末から清初期の中国に天王殿があった根拠となる。

また、清代に記された揚子江南部にある二十ヶ寺の寺志において、天王殿に関する多くの重修の記述が記され、内部の様子の記述もある。清代末期編纂の『續金山志』には

大肚能容了却人間多少事 天王殿彌勒龕 光緒六年小陽月  
 滿腔歡喜笑開天下古今愁 中州固陵吳氏伯子霽如春熙敬獻<sup>(6)</sup>

と聯に書かれていたことが記されており、布袋の彌勒菩薩像が祀られていることがわかる。

清代初期編纂の『少林寺志』では

天王殿 外塑金剛像内塑四天王外舊有額曰天下第一祖庭清康熙四十三年奉 頒少林寺御書三大字扁額懸掛殿外。<sup>(7)</sup>

とあり、天王殿外側に金剛像塑像が、内側に四天王の塑像が祀られている。

さらに、同時期に記された多くの語録の中に「天王殿」の語が見いだせることから、その存在がより明確となる。また、『永覺和尚廣録』<sup>(8)</sup>『密雲悟禪師語録』<sup>(9)</sup>『天界覺浪盛禪師全録』<sup>(10)</sup>『雪關禪師語録』<sup>(11)</sup>『憨山老人夢遊集 卷第二十四』<sup>(12)</sup>『費隱禪師語録 卷第十四』<sup>(13)</sup>など、明末期から清初期の傑僧等の語録によって寺院復興に際し天王殿を重建したことが随所で確認できる。

そして同時期に重建された寺院の多くの内部には、弥勒菩薩と韋馱天像が背中合わせに祀られ、脇に四天王像が配置されていることが寺志に記されており、<sup>(14)</sup>清代初期にはこの形式が一般的であったことは明らかである。

### 3. 明代における「天王殿」の存在

#### 3-1. 明代後期における「天王殿」の存在

明代は天王殿の存在を示す史料の数が多いため、後記、中期、初期の順に史料を分類し見ていくことにする。まず、明代後期における史料として『金陵梵

#### 4 『禪學研究』第98號, 2020年3月

刹志<sup>(15)</sup>』を取り上げる。禪院の様子を記したこの史料は、万曆三十五年（1607）に南京僧録司によってまとめられたものであるが、廢寺も含め南京（金陵）に属する寺院全ての様々な情報が記されている。

寺院はその寺格に応じ、大刹三ヶ寺、次大刹五ヶ寺、中刹三十七ヶ寺、小刹一二九ヶ寺がありこれらの寺院全ての伽藍配置が記されている。確認したところ、大刹三ヶ寺、次大刹五ヶ寺ともに中心軸の堂宇に天王殿が組込まれ、その配置は、山門—金剛殿—天王殿—仏殿が基本形式となっている。寺院によって、山門がない場合、あるいは金剛殿がない場合もあるが、天王殿—仏殿の形式は固定化している。

さらに、『武林梵志<sup>(16)</sup>』の「梵天講寺<sup>(17)</sup>」や「光孝寺」、『普陀洛迦新志<sup>(18)</sup>』の「禪徳門第六 明 一乗」などの史料からも、江南の地における寺院復興に際して天王殿を重建した記述が窺え、明代後期における天王殿の存在が確認できる。

#### 3-2. 明代中期における「天王殿」の存在

明代中期、伽藍配置は軸線上に山門、天王殿、仏殿が並び立つ形式であったことが『獻花巖志』から明らかである。成化丙午年（1486）に修建された堂宇の規模や、山門—天王殿—仏殿の配置の記述があり天王殿が伽藍に組み込まれていたことは確かである。

これまでに取り上げてきた明代後期までの史料からは、天王殿の存在の有無は確認できたが、記述の内容は重修や修建であるため、建立時期に関しては知りえなかった。しかし『呉都法乗<sup>(20)</sup>』や『武林梵志<sup>(21)</sup>』の史料は、天王殿の建立時期が明確となる。『呉都法乗』は、江蘇省呉地に構える禪院や仏事に関する記事が編纂されたもので、明代における各寺院の重建についての詳細な記述が記されている。そのため各堂宇の修復の変遷がわかり天王殿が独立した建物として建立された年代を探る貴重な史料の一つとなる。

たとえば『呉都法乗』「定光講寺重建天王殿記<sup>(22)</sup>」や『武林梵志』「福壽寺<sup>(23)</sup>」の史料からは、天王殿の建立時期が成化年間（1465- 1487）であることが明らかとなった。

### 3-3. 明代初期における「天王殿」の存在

天台教壽安寺が寺観を整える過程において、元代に大雄殿、三門（山門）、選佛堂が造営され、焼失後の再建では、宣徳六年（1431）に山門は重建、宣徳七年（1432）に四大天王殿が新たに建立された記述が記されている<sup>(24)</sup>。このことから明代初期、宣徳七年（1432）に天王殿は独立した堂として建立されていたことがわかる。

虎丘雲巖寺関係の文書からは、更に造営時期の古い記録が記されている。虎丘は蘇州の城外西北に位置する小高い丘であり、古くからの歴史を持つ景勝地でもある。この丘の上にある虎丘雲巖禪寺では、幾度も焼失と再建を繰り返していたが宣徳八年（1433）の焼失後、再度伽藍の復興に取り掛かる。この間の状況は『呉都法乗』に収録されており、これらの史料から伽藍再興の変遷を時系列でまとめることができる<sup>(25)</sup>。

虎丘雲巖寺は、洪武二十七年（1394）伽藍焼失後、復興にとりかかると漸次旧観を取り戻していく。永樂元年（1403）に佛殿、七重塔、文殊殿、を重建し、永樂十七年（1419）には庫裡、東廊が、翌年には西廊、選佛場が造営される。永樂十九年（1421）に千佛閣を重建し、宣徳元年（1426）に裳階のついた天王殿が建立された。そして宣徳三年（1428）に落成を迎える。その後さらに僧堂、三大士殿、浴堂などが建てられ伽藍は整備された。

宣徳元年（1426）に天王殿は建立されたが、史料には「重建」と記されず「建」が使われている。焼失以前の「山上旧寺」の項目に記されている伽藍名と、復興後の「新寺」のそれとを比較すると、再建や修理された建物には「重建」を、新寺建立に伴い新たに建てられたものには「建」を用い使い分けがなされている。確かに、山上旧寺には山門はあるが、天王殿の記述はない。すなわち、虎丘寺の天王殿は建替えではなく、宣徳元年（1426）が初めての建立であったことを意味する。

天王殿造営時期のより古い記録として『鄧尉山聖恩寺志』がある。

本朝洪武九年闢建觀音閣徒普壽構法堂又徒普隱等建大殿齋厨三塔院又徒普

持鑄巨鐘建層樓永樂七年智瑫重修大殿建藏經閣天王殿方丈山門寮庫碧炤軒  
正統八年僧道立奏請<sup>(26)</sup>

ここには聖恩寺において永樂七年（1409）に虚碧智瑫が大殿を再建し、藏經閣、天王殿、方丈、山門、寮庫を建造したと記されている。この事実をこれまでの調査と比較した結果、永樂七年（1409）が、伽藍の構成要素の一つとして天王殿が組み込まれたことを示す史料として、明代最古の年号と言える。

## 4. 元代における「天王殿」の存在

### 4-1. 元代における「天王殿」の萌芽

元代の史料には、若干の史料を除き天王殿の文字は殆ど表れなくなる。笑隱大訢による『蒲室集』には、

新寺二碑，各高三丈許，大作想再奏聞，莫審何日頒下。寺中工作俱將畢，諸牌額大字見刊，但後殿素五方佛，與天王殿、摩哈刺殿、東西過街樓，未  
有書扁。向岳住公回都，曾列奏目，必命妙畫，而胡久不發下也。<sup>(27)</sup>

とあり、新寺には護法神として四天王、大黒天（Mahākāla）を奉るための、それぞれ独立した天王殿、摩哈刺殿が建立されていたことがわかる。この新寺は、大黒天を奉っていることからチベット仏教寺院であり、笑隱大訢（1284-1344）が「與虞伯生學士書」を記した元代後期には天王殿が存在していた、ということである。

また、釋廷俊（1299-1368）による『崇明寺藏經院記』<sup>(28)</sup>の中で、江蘇省句容県崇明寺には堅固な造りをした天王殿と鐘樓が古くからあると書かれており、元代後期に天王殿が存在していたことが確認できる。

ところが元代至正四年（1344）「至正金陵新志」<sup>(29)</sup>に記された金陵の二十か寺には天王殿に関する記述はなく、また「五山之上」として官寺の役割を果たした大龍翔集慶寺の伽藍配置を描いた「大龍翔集慶寺図」<sup>(30)</sup>にも天王殿はなく、三門が描かれている。また『呉都法乘』の「元敕建大昭慶寺碑」<sup>(31)</sup>には、寺院造営

の記載があり、それによると、大昭慶寺は天曆元年（1328）に魯国公主の命により造営された大寺院であり、四天王像が祀られてある大門、大殿、法堂、方丈その他を含む大伽藍が建造された、と記されている。すなわちこの伽藍構成の中に「天王殿」と呼ばれる独立した堂宇はなく、また四天王像は大門に祀られていることが確認できる。

同時期、虞集（1272-1348）も「昭慶寺碑」<sup>(32)</sup>の中で、四天王像は大門の中に奉じられ、独立した堂ではなかったことを記している。虞集はまた「大承天護聖寺碑」も撰しているが、その文からは、大承天護聖寺の伽藍配置がわかり、天王殿の有無が確認できる。

雲寺之前殿寘釋迦、然燈、彌勒、文殊、金剛並二大士之像。後殿寘五智如來之像。西殿度金書《大藏經》，皇后之所施也。東殿，度墨書《大藏經》，歲庚午，上所施也。又像護法神王於西室，護世天王於東室。二閣在水中坻，東曰圓通，有觀音大士像。西曰壽仁，上所御也。日神御殿，奉太皇太后啐容於中。<sup>(33)</sup>

大承天護聖寺は天曆二年（1329）に建立された大都勅建寺院であるが、上記によれば前殿、後殿、西殿、東殿、池の中島に二閣が建つ伽藍配置をなし、護世天王は天王殿ではなく、東殿東室に祀られていることがわかる。

次に元初、劉敏中（1243 - 1318）が記した「敕賜大都大智全寺碑文」からは、大智全寺の伽藍配置を知ることができる。

大智全寺者、儀天興聖慈仁昭懿壽元皇太后作也。寺之制，爲正殿，位三聖佛。爲前殿，位觀世音菩薩。殿於右，九子母所。殿於左，羣經之藏。北爲別殿，備臨幸。闢三門，四天王掖之。由別殿左右柝而南，至於門，曰廊，曰僧房，曰齋堂，薨連棟接，絡繹環匝。門之外二亭，西曰寶華，東曰瑞慶。<sup>(34)</sup>

この碑文が記されたのは、昭猷元聖皇后答己が上皇太后の尊号を贈られ儀天興聖慈仁昭懿壽元皇太后となった至大三年（1310年）十月以降、アユルバルワダから即位後尊号を賜り儀天興聖慈仁昭懿壽元全德泰寧福慶皇太后となった延祐二年（1315）以前となる。この時期には門の両脇に四天王が配されている

ことがわかる。

同じく元初、趙孟頫(1254-1322)による「大元大普慶寺碑銘」<sup>(35)</sup>には多聞天王のための独立した堂が建てられたことが記されている。大元大普慶寺は大徳4年から至大元年(1300-1308)に建立された寺院であり、多聞天王の像は西殿に奉られ、天王殿ではなかった。

以上の史料から、元代後期には天王殿の存在が認められるが、勅建寺院などには天王殿は見られず、四天王像は門の中に奉られ、独立した堂であっても、天王殿の名称ではなかったことが明らかとなった。

また、建築史家の横山秀哉は『禪の建築』の中で「天王殿の制は宋の禪規にはもちろん、恐らく元初までは禪院にはなかったのである。」<sup>(36)</sup>と見解を示しているが、この論中の「宋の禪規」とは、北宋時代の『禪苑清規』を指し、[恐らく元初まで]とは、咸淳十年(1274)に惟勉が著した『叢林校定清規総要』、至大四年(1311)に成立した『禪林備用清規』を意味していると思われる。

これら三種の清規に記述がない、ということは該当する建物がないため、その場で必要とされる規則も存在しないことを意味し、このことは南宋五山に天王殿が存在しない有効な根拠と考えられる。至元二年(1336)より至正三年(1343)の間に完成した『勅修百丈清規』にも天王殿に関する記述の記載はないことから、この清規がまとめられた元後期、禪院において天王殿はなかった可能性が高いと考えられる。

ところが明代後期に撰述された『武林梵志』の大覚禪院の項には次のような記載がある。

五代周顯徳間燬 元武宗至大三年詔拳烏石山僧世愚重建正殿天王殿法堂等<sup>(37)</sup>

ここには後周の顯徳期に焼失した寺院を、元の至大三年(1310)に正殿、天王殿、法堂等を世愚が再建した、と記されている。この記述によれば、元代初期に「天王殿」と称する堂宇が存在していたことになる。

さらに『武林梵志』の遍福寺の項には、後晋から宋代にわたり天王殿が存在していたことを示す記述もある。後晋の天福七年(942)に天王殿を建立し、

宋の治平二年（1060）に焼失した。<sup>(38)</sup> というものである。

これらを記載通りに受け取り、「天王殿」は後晋、宋代、元代に存在し、それが、寺院の伝承として残った、と捉えるか、あるいは、撰述された明代後期において、「天王殿」は伽藍を構成する当然の堂宇と見なされていた状況に則り、「山門」を「天王殿」と称したのか、现阶段では判断できない。『武林梵志』において、明代以前の天王殿に言及しているのは、上記の2例のみである。この点に関しては留意する必要がある。ただ、後者の説を証する史料もあり、それは明代前期に編纂された「増修徑山興聖萬壽禪寺記」の中で記されている。

徑前作大門樓 自書「天下徑山」之扁 其天王殿門之扁 則駙馬都尉沐公所書<sup>(39)</sup>也。

この中で、大門樓を「その天王殿」と言い換えていることから、明代前期には天王殿と山門を同様の堂宇ととらえていたことが考えられる。

同様に『勅建淨慈寺志』の中でも、「淨慈寺舊志」では、彌勒像、韋馱天像、金剛神像を祀った建物を南宋代に建て直した際には三門と呼び、清前期に書かれた「淨慈寺新志」では天王殿と言い換えていることから、天王殿と山門を同一視していたことは明らかである。<sup>(40)</sup>

#### 4-2. 元代におけるチベット建築の影響と「天王殿」の存在

以上のように限られた史料のなかで、天王殿の存在の有無を結論付けることは課題も多い。そのため、建築学的な見地からも天王殿の存在について考察を試みる。天王殿に言及する論文の中で、横山秀哉の天王殿に関する論考は数多く参照されており、ここに関係箇所を引用する。

明清時代の禅刹に見られる四天王像は、伊東忠太が「北清建築調査報告」や「満州の佛寺建築」の中で指摘されているように喇嘛教色彩のものと見るのが妥当である。中国における喇嘛教の発展は元が一大帝国を樹立した後、西藏の八思巴を請して国師とし、喇嘛教をもって国教とした以後のことである。したがって、喇嘛式四天王像が示すように天王殿は元の盛時以後の様式で禅院にも普及し、これを黄檗寺院が将来したことに不思議はな

い。天王殿の制は宋の禪規にはもちろん、恐らく元初までは禪院にはなかった<sup>(41)</sup>のである。

と述べている。すなわち、天王殿はチベット仏教（ラマ教）の影響によって元初期以降現れ、それが禪院に広まった、という見解である。

元では歴代皇帝によってチベット仏教（ラマ教）が篤く崇敬され、チベットの仏教寺院建造や仏像製作が続いたが、その影響をどのように考えるべきか。すなわち天王殿はチベット仏教の影響のもとに元代に出現したのか、という点についてである。横山は「喇嘛式四天王像が示すように、天王殿は元の盛時以後の様式で禪院にも普及<sup>(42)</sup>」と言い、また横山以外の論考でも「天王殿というのは、ラマ教特有のもの<sup>(43)</sup>」「これ（天王殿）はラマ教からの移入<sup>(44)</sup>」「萬福寺は禪淨混淆思想の発展及び羅魔教寺院の影響を受けた形式を輸入したもの<sup>(45)</sup>」などとチベット仏教との強い関連性が指摘されている。そうであるなら、チベット仏教建築の中に天王殿、あるいは類似の建築物が存在、あるいは内在していることになる。

チベット建築の標準的な平面構成は、寺院の内部空間が仏殿、経堂、前殿の三つに区切られている形式である。仏殿は巨大な尊像を中心に多くの仏像が祀られ、厚い壁で仕切られ、高く、閉ざされた空間となっている。そのため、仏殿前の広い空間は礼拝の場ではなく、経堂として僧侶の經典の読誦や議論の場となっている。経堂は柱が立ち並び、中央に吹き抜けを持つ二層構造で、一階の広いホールには机などが並び置かれ、二階は居室空間にあてられている。経堂から前殿を通り建物を出ると柱列のあるポーチがあり、その前面には中庭が入口門楼から伸びる廻廊に囲まれている。

このような平面を持つチベット寺院の一つとして夏魯寺（シャル・コンパ）<sup>(46)</sup>が挙げられる。元代はチベット仏教が最上位に位置づけられ、寺院の造営、重建は相当数にのぼり、絶大なる権力を保証されていた。夏魯寺では大地震で損壊した寺観復興のために1333年大規模な修復工事が行われたが、多額の修繕費は元の皇帝によるものであった。そのため工事の際には、中国から多くの大

工が集められ、中国（元代）の建築様式を持つチベット寺院が造営された。確かに中国建築の影響が斗栱や軒、屋根瓦など随所に表れているが、平面計画となると、それはチベット建築そのものであり天王殿、あるいはそれに該当するような建築物は見当たらない。四天王に関するものとしては壁画があり、前殿の入り口の壁面に二体ずつ左右に分かれて描かれ、他のチベット寺院も同様の形式を持つ。しかしこの構成から天王殿として建物が分離独立することは、非常に考えにくい。さらに、伽藍配置は自然の地形に合わせたもので、中心軸や左右対称の構成は持たない。

では、チベット寺院が中国地域に建てられた場合はどうであろうか。チベット寺院建築は中国寺院に影響をもたらしたのか検討を加える。

元の首都、大都に建立されたチベット仏教寺院に大聖寿万安寺がある。大聖寿万安寺は至元九年（1272）、元朝初代皇帝であるクビライによって建立された大寺院であるが、ここにはネパール人工匠によって造営された、中国初となるチベット式仏塔がある。塔はチベット式であったが、寺院建築の構造や伽藍構成はチベット様式ではなく、伝統的な中国様式を選択していたことを村田治郎、福田美穂らは指摘している。<sup>(47)</sup>この後歴代皇帝によって、大都にはチベット仏教寺院が相次いで建立されるが、大聖寿万安寺はこれらの範となる重要な寺院であり、その後につづく寺院も中国様式の構造と配置を持つものであった。

これらのことから、元代に建造された寺院建築は、チベット建築の影響を受けた、とは言い難く、天王殿はチベット寺院の影響によって出現したのではなく、中国寺院から出現したものと考えられる。

## 5. 南宋代における「天王殿」の存在

日本に天王殿が存在しなかった最大の理由として、日本が導入した南宋五山の伽藍配置に天王殿は存在しなかったことを挙げたが、そのことは『支那禅利図式』などで確認できる。これは南宋末期、入宋僧が当時の五山の伽藍配置や殿堂、あるいは法具などを詳細に図解し日本に持ち帰り、その後模写されたも

のである。写しが東福寺、大乘寺などに五本伝来し、『大宋諸山図』は東福寺に伝わる名称であり、大乘寺には『五山十刹図』として伝来している。

東福寺蔵『大宋諸山図』<sup>(48)</sup>の靈隠寺、天童寺、天台万年寺それぞれの配置図で確認しても中心伽藍に天王殿は存在しない。但し天台万年寺の三門の東西の脇にそれぞれ、二天の文字が記され、これらは四天王を表していると考えられる。しかし、天王殿として独立した堂宇が存在しているわけではない。

また、「径山興聖萬寿禪寺記」には、径山寺が火災後復興を遂げた様子が描かれているが、五山一位の寺院による大々的な復興にも関わらず、その中に天王殿の文字はない。山門（桁行九間重層）、仏殿、法堂、方丈が軸線上の堂宇であった<sup>(49)</sup>。

以上のように、日本が鎌倉時代に禅宗を導入した当初から伽藍配置に天王殿は存在せず、その後日本の状況に合わせた伽藍の種類や配置に変化はあったものの、中心伽藍となる山門—仏殿—法堂—方丈の形式は、禅宗を受け入れた当初のまま変わることなく江戸期以降も続いたのである。

一方中国では、南宋の後の時代、元、明、清と統治民族が入れ替わる大きな変動が続いたが、その間天王殿が伽藍の構成要素に組み込まれたことにより、中心伽藍は山門—天王殿—大雄宝殿—法堂に固定された。

## 6. 金代における「天王殿」の存在

南宋の五山建築に天王殿は存在しなかったことは前述したが、金代における天王殿の存在に関し現存する金代建立の寺院建築である山西省大同市の善化寺を例として検証する。

この寺院の伽藍構成は、南北の軸線上に天王殿—三聖殿—大雄宝殿が並び、東西に観音殿と地藏殿が左右対称に置かれ、中国建築における伝統的な伽藍配置となっている<sup>(50)</sup>。天王殿には四天王像が納められていることにより、このように称されているが、正式には山門である。これが、当初から天王殿ではなく、山門であったことは、善化寺に保管されている石碑に記されていることから明

らかである。その石碑は、善化寺の修復・再興を記念して金代の大定十六年(1176)に建立されたもので、碑文「大金西京大普恩寺重修大殿記」には再興された堂宇が記されている。

凡爲大殿。暨東西朶殿。羅漢洞。文殊普賢閣。及前殿。大門。左右斜廊。  
合八十餘楹。<sup>(51)</sup>

この碑文中の「大門」が現在の天王殿である。梁思成によれば、山門は建築様式から判断して寺院再興時の金代に造営されたもので、四天王像はそれよりも新しく明代以降と結論付けている。<sup>(52)</sup>

このことから、金代に「大門」と呼ばれていた堂宇は、確かに形式は前後に扉をもつ山門であるが、四天王像が納められた明代以降、天王殿と称されるようになったと考えられる。大寺院であった善化寺に天王殿がなかったのであれば、少なくとも天王殿は一般的な堂宇としては存在していなかった、と想定できよう。

ところが、山西省太原市における北魏から現代に至る碑刻 179 点中 1 点ではあるが、崇慶元年(1212)「尚書禮部賜菩薩普淨院牒」に「韋馱菩薩殿、四大天王殿、十八羅漢殿」<sup>(53)</sup>とあり、金代末期、四天王像が奉られた天王殿の存在がうかがえる。

## 7. 宋代以前における「天王殿」の存在

河北省正定にある龍興寺は北宋代に大改修された寺院であるが、各殿宇は中軸線上に山門、大覚六師殿、魔尼殿、大悲閣、と並ぶ伽藍配置である。山門は金代(1115～1234)に建てられ、天王殿とは呼ばれていない。また、開封城中央に位置する北宋の大寺院である大相国寺は当時の代表的な伽藍配置として、中軸線上に三門、彌勒殿、資聖閣が並び周囲を回廊が取り囲む構成となっている。そしてそれらの殿宇の正面には大三門が置かれている。<sup>(54)</sup>このように二つの門が並んで置かれているが、天王殿はない。日本でも中国の影響により、法隆寺などの南都七大寺では、どの寺院も南大門の内側に中門を配している。

中門には金剛像などが安置される場合が多く、現代に至るまで天王殿に名前が変更することはなかったが、中国では、この第二の門が天王殿と称せられるようになった、と考えられる。

清代に編集された『保国寺志』で、天王殿が北宋祥符6年(1013)に重修された、と記されている。<sup>(55)</sup>ここで、字句通り祥符6年に天王殿を重修した、とするか、あるいは清代には、既に門を天王殿と捉えてた時代であるから、宋の時代に門を重修したのを、清代の呼称に合わせ天王殿と記したのか、判断が難しい所である。文字通り天王殿を重修したのであれば、祥符6年(1013)が記録として最古のものとなるのである。

中国における四天王信仰は北魏時代にすでに始まり唐に最盛期を迎えている。こうした事実を踏まえるならば、唐代以前に天王殿があった可能性も考えられるため「天王殿」の語が表われる史料を検討すると、北魏代に瞿曇般若流支によって訳出された『正法念處經』の中で「天王殿」の語句が用いられ、寶石で美しく飾られた殿内の様子が記載されている。<sup>(56)</sup>また唐代の李通玄による『新華嚴經論』にも「天王殿」の語句は表われてはいるが、いずれも経文中の描写であり、観念的である。<sup>(57)</sup>しかしながら、北魏代からすでに「天王殿」に対する概念が存在していたことは確認できる。

また唐代の元友諒「汝川縣唐威戎軍製造天王殿記」の物語の中で、唐土を敵から守るために天王殿が建造されたことが記されている。<sup>(58)</sup>天王殿は護国のための建造物として捉えられていたことがわかる。

南宋代、咸淳五年(1269)に天台宗の志磐が編集した『佛祖統紀』には、唐代に「天王堂」が成立した故事が示されている。

天寶元年西城大石康居五國。入寇安西。召師入内。上親秉香鑪。師誦仁王護國密語。方二七遍。上忽見神兵可五百人。帶甲荷戈立於殿庭。師曰。此毘沙門天王第二子獨健。副陛下意往救安西。請設食以遺之。至四月安西奏。二月十一日。城東北黑雲中見金甲人丈餘。空中鼓角大鳴聲震天地。寇人帳幕間有金鼠齧斷弓弦。五國即時奔潰。須臾城樓上見天王形。謹圖其像以進

驗之。即誦呪日也。乃勅諸道。於城西北隅置天王像（今城樓軍塋立天王堂者即其故事）<sup>(59)</sup>

唐代の作品である『歴代名画記（卷三）』『記兩京外州寺觀画壁』には、長安城東京の甘露寺内に「天王堂」が存在し、外壁には菩薩の絵が描かれていた記述が見られる。<sup>(60)</sup>『歴代編年釋氏通鑑』の咸通六年（860）の項には、毘沙門天王堂の建立が記されている。さらに唐、五代に記された「慧聚寺天王堂記」にも天王堂が西北隅に置かれたことを示す記述が見られる。<sup>(62)</sup>

同じく唐代の段成式による『寺塔記 卷上』には「天王閣」に関する記述が見られる。

天王閣。長慶中造。本在春明門内。與南内連牆。其形大為天下之最。太和二年勅移就此寺。折時腹中。得布五百端漆數十筩。今部落鬼神形像墮壞。唯天王不損。<sup>(63)</sup>

上記によれば、天王閣は天下最大とも称された巨大な建物で、長慶年中（821-824）に春明門内側に興慶宮と城壁を連ねて造営されたが、大和二年（828）に天王像とともに興善寺に移されている。

上記から、唐代において天王堂、天王閣は、護国のための建造物であったことがわかる。北方を守護する神である毘沙門天像を祀る堂宇として建立され、城の門に置かれていたことが読み取れる。

「天王堂」は、後の史書にも表われるが、殆どが唐代の「天王堂」に関わるものばかりであった。「天王閣」「天王堂」は、都城守護の目的として毘沙門天像を城門に祀るための建物であったものであり、これが寺院でも用いられるようになり、ある時から「天王殿」と称されるようになった、と推定される。

## 8. 結論

江戸時代初期、中国の萬福寺を範として隠元禅師が日本に建立した黄檗宗萬福寺には、「天王殿」と呼ばれる堂宇がある。しかし日本では黄檗宗寺院以外

には存在しない珍しい堂宇である。その一方で、中国では中心伽藍の構成要素の一つとして、どの寺院でも見ることのできる馴染みのある堂宇となっている。

日本の禪宗寺院の伽藍配置に天王殿が存在しない理由として、禪宗を取り入れた当時の中国南宋時代に、「天王殿」と言う名の堂宇が存在しなかったことがあげられる。そうであるならば、中国においてその存在が明らかとなるのはいつからか、また外部の影響によって出現したのか。

これらの疑問に対し、中国に仏教が伝来した一世紀以降の史料を用い、「天王殿」の類似表現も含めた語について使われ方を考察した。

類似表現には、「四天王殿」「天王堂」「天王閣」の三種類があり、<sup>(65)</sup> 都城守護の目的で建立されたものである。四天王本来の仏法守護の役割のための堂宇として「天王堂」が寺院に置かれた例もあるが、実態は不明である。四天王像は仏法の守護神として奉る場は主に山門が多く、元代まで続く。

各時代における仏閣に関する種々の史料を検討した結果、伽藍構成において、山門とは異なる、独立した「天王殿」としての存在が史料に表われるのは、金代末期、崇慶元年（1212）の普淨院石碑に記された「四天王殿」である。但し候補として北宋祥符6年（1013）も挙げておく。

明代初期には門と天王殿を言い換える記述が見られ、それ以降、「天王殿」は数多く史料に表われるようになる。その後伽藍の構成要素の一つとして天王殿が組み込まれ、明代後期、清代初期には、伽藍の中心軸上で仏殿の前方に置かれる構成が定例化されていった。

即ち、山門－天王殿－大雄宝殿（仏殿）－法堂という一連の堂宇が軸線上に並び、その周囲を回廊が取り囲む伽藍配置が清代以降固定化されていったのである。

以上中国における天王殿の変遷を明らかにしたが、天王殿に彌勒菩薩が祀られ、しかも彌勒の化身として姿を現した布袋像が祀られるようになった経緯は、今回の史料から見出すことはできなかった。

明代の史料である『金陵梵刹志』には、彌勒殿と天王殿がそれぞれ独立して

建てられている寺院が記されているが、各堂宇の内部に関しては記述がない。天王殿の内部に関して、明代に記された「慧因寺志卷之五」に以下の記述が見いだせる。

天王殿 舊已廢。萬曆間、寺僧易菴通建。以玉岑緊逼無隙地、即山門為之。  
旁設四天王、中龕向背俱觀音像。不知何人作此。<sup>(64)</sup>

華嚴の講院である慧因寺は、万暦年間に易菴によって重建されたが、上記によれば、寺域が狭いために山門に四天王像を設け、龕の表側も背側にも両方観音像が置かれたことが記されている。万暦年間（1573～1620）頃も天王殿は四天王が中心であり布袋弥勒は未だ祀られることはなかった、ということか、あるいは布袋弥勒を祀ることは禅院では一般的であっても講院では弥勒菩薩ではなく観音菩薩が祀られた、とすることであろうか。しかしながら、これ以上のことは確認できなかった。

天王殿に彌勒菩薩の化身として布袋像を祀るようになった経緯や変遷などを明らかにすることを今後の課題としたい。

## 注

- (1) 伊東忠太「北清建築調査報告」「満州の佛寺建築」『東洋建築の研究 上』（龍吟社 1936年11月）
- (2) 関野貞、常盤大定共著『支那文化史蹟 六』（法蔵館 1939年）
- (3) 『金陵梵刹志』『武進天寧寺志』『天童寺續志』『雲門山志』『七塔寺志』『雲居山志』『厦門南普陀寺志』『北天目靈峰寺志』『金陵大報恩寺塔志』
- (4) 「萬福禪寺」『黄檗山寺志 卷二』（杜潔祥主編『中國佛寺史志彙刊』丹青圖書 1985.11）
- (5) 川上貢「宇治萬福寺伽藍の造営と大工について」『日本建築学会 近畿支部 研究報告書』昭和50年
- (6) 釋秋崖撰『續金山志 卷上』清光緒二十六年刊本（杜潔祥主編『中國佛寺史志彙刊』明文書局 1980.1 P.18-1）
- (7) 葉封等輯『少林寺志』段48 清乾隆十三年刻本（白化文、張智主編『中國佛

寺志叢刊』6 廣陵書社, 2006.1 P.5-2)

- (8) 「重建鼓山湧泉禪寺記」『永覺元賢和尚廣錄』卍新纂大日本續藏經 第72冊 第15卷 p.470a
- (9) 「密雲禪師語錄(年譜附)」『密雲悟禪師語錄』乾隆大藏經 第154冊 第10卷 p.611b
- (10) 「西江奉新嚴省齋居士請護國上堂」『天界覺浪盛禪師全錄』嘉興大藏經 第34冊 第4卷 p.612b
- (11) 「妙行語錄」『雪關禪師語錄』嘉興大藏經 第27冊 第3卷 p.456c
- (12) 「嘉禾金明寺大定堂記」『憨山老人夢遊集』卍新纂大日本續藏經 第73冊 第24卷 p.638a
- (13) 「海虞破山洞開法乘禪師」『五燈全書』卍新纂大日本續藏經 第82冊 第120卷 p.720b
- (14) 『大昭慶律寺志』『蘆山寺志』『禪悅寺志』『僊山僊心寺志』『勅建弘慈廣濟寺新志』
- (15) 『金陵梵刹志』大藏經補編 第29冊
- (16) 「梵天講寺」『武林梵志』(四庫全書本) 大藏經補編 第29冊 第2卷
- (17) 「光孝寺」『武林梵志』前揭書 第6卷
- (18) 「禪德門第六 明 一乘」『普陀洛迦新志』第6卷(杜潔祥主編『中國佛寺史志彙刊』第六卷 明文書局, 1980.1 p.3a)
- (19) 孫文川, 陳作霖撰, 陳沂撰「南朝佛寺志」『獻花岩志』(白化文, 張智主編『中國佛寺志叢刊』28 廣陵書社, 2006.1)  
關一山門朱其垣北向山門內之左右建樓二置鐘鼓中石甃數級上有天王殿四楹殿之後有大悲殿皆不甚崇廣然蓋覆盤據甚得構山之宜殿後又歷上有亭置修建之碑大宗伯李公本所撰文紀歲為成化丙午也
- (20) 「定光講寺重建天王殿記」『吳都法乘』大藏經補編 第34冊 第10卷 p. 322b
- (21) 「福壽寺」『武林梵志 第4卷』前揭書 第4卷 p.537 b
- (22) 「定光寺興造記」『吳都法乘』大藏經補編 第34冊 第10卷 p. 322a
- (23) 「天壽聖恩禪寺事蹟記」『吳都法乘』前揭書 p. 355a
- (24) 「重建天台教壽安寺碑記」『吳都法乘』前揭書 p. 399b
- (25) 「虎丘雲巖寺記」「重興虎丘雲巖禪寺碑」「虎丘雲巖禪寺修造記」「虎丘山重脩

萬佛閣記重脩」「虎丘千佛閣記」「虎丘寺」「山上舊寺」「新寺」「虎丘雲巖寺記」  
「重興虎丘雲巖禪寺碑」「虎丘雲巖禪寺修造記」「虎丘山重脩萬佛閣記」「重脩  
虎丘寺千佛閣記」「虎丘寺」「山上舊寺」「新寺」「虎丘雲巖寺記」『吳都法乘』  
前掲書

なお、「虎丘雲巖禪寺記」『古今圖書集成選輯』大藏經補編 第15冊第115卷 p.628  
と「虎丘雲巖禪寺修造記」『吳都法乘』前掲書 p.330a 以上2本はほぼ同じ  
文章であるが、「虎丘雲巖禪寺記」にはより詳細な情報が含まれている。

- (26) 周永年撰『鄧尉山聖恩寺志』（白化文，張智主編『中國佛寺志叢刊』44 廣陵書社，2006.1）
- (27) 笑隱大訢「與虞伯生學士書」『蒲室集』大藏經補編 第24冊 第1卷
- (28) 釋廷俊「崇明寺藏經院記」（李修生 主編『全元文 卷一四六四』鳳凰出版社 1998年9月 第1版 第15頁）
- (29) 『至大金陵新志』（四庫全書本）但し『至大金陵新志』は誤りであり、『至正金陵新志』とする。
- (30) 『至正金陵新志 卷一』（四庫全書本）
- (31) 「元敕建大昭慶寺碑」『吳都法乘』大藏經補編 第34冊 第10卷 p.302b
- (32) 虞集 七六「昭慶寺碑略」（李修生 主編『全元文 卷八八九』鳳凰出版社 1998年9月 第1版 第477頁）
- (33) 虞集 五「大承天護聖寺碑」（李修生 主編『全元文 卷八六八』鳳凰出版社 1998年9月 第1版 第184頁）
- (34) 劉敏中「敕賜大都大智全寺碑」（李修生 主編『全元文 卷三九六』鳳凰出版社 1998年9月 第1版 第524頁）
- (35) 趙孟頫 九「大元大普慶寺碑銘」（李修生 主編『全元文 卷五九九』鳳凰出版社 1998年9月 第1版 第289頁）
- (36) 横山秀哉『禪の建築』（彰国社 1967年）p.135
- (37) 「大覺禪院」『武林梵志 第4卷』（四庫全書本）大藏經補編 第29冊 第4卷 p.538a
- (38) 「遍福寺」『武林梵志 第4卷』（四庫全書本）大藏經補編 第29冊 第4卷 p.556b
- (39) 「增修徑山興聖萬壽禪寺記」『徑山志卷之七』（杜潔祥主編『中國佛寺史志彙刊』第七卷 p.657a 明文書局，1980.1）

- (40) 『勅建淨慈寺志 卷一』 興建一 總敘 (P. 6) 清光緒十四年錢塘嘉惠堂丁氏重刻本
- (41) 橫山 秀哉『禪の建築』(彰国社 1967年) p.135
- (42) 同書、pp.334—335
- (43) 京都府教育庁指導部文化財保護課編『重要文化財 萬福寺天王殿修理工事報告書』(京都府教育委員会 昭和61年) p.9
- (44) 吉谷和彦他3名「黄檗宗伽藍の特徴について」—特に「天王殿」に注目して—(九州支部1990年度支部研究発表梗概)『建築雑誌・建築年報』1991, p.150
- (45) 谷村為海『萬福寺の建築』(萬福寺 昭和36年) 6月
- (46) 潘谷西 主編『中国古代建築史 第4卷 元明建築』(中國建築工業出版社 2001) pp.334—335
- (47) 村田治郎『中国建築史叢考 仏寺仏塔篇』(中央公論美術出版 昭和63年3月) 福田 美穂「元朝の皇室が造営した寺院: チベット系要素と中国系要素の融合」『種智院大学研究紀要』No.9, 2008.3
- (48) 関口欣也『五山と禪院 関口欣也著作集3』(中央公論美術出版 2016年4月)
- (49) 「徑山興聖萬壽禪寺記」『徑山志卷之七』(杜潔祥主編『中國佛寺史志彙刊』第七卷 p629a 明文書局, 1980.1)
- (50) 善化寺総平面図: 郭黛姩 主編『中国古代建築史 第3卷 宋、遼、金、西夏建築』(中國建築工業出版社 2003) p.333
- (51) 水野清一「大同善化寺石刻録」『東方学報』京都第十冊第四分 昭和十五年一月
- (52) 梁思成『梁思成全集』第二卷(中國建築工業出版社 2001)
- (53) 梁俊杰主編『三晋石刻大全』太原市婁煩県卷 刘泽民总主編; 李玉明执行总主編. 三晋出版社 2016.
- (54) 北宋東京大相国寺主院平面復原示意図: 郭黛姩 主編『中国古代建築史 第3卷 宋、遼、金、西夏建築』(中國建築工業出版社 2003) p.257
- (55) 敏庵編「保國寺志」白化文, 張智主編 中國佛寺志叢刊; 83 廣陵書社 2006
- (56) 大正 卷一七 p.721a
- (57) 大正 卷三六 p.739b
- (58) 元友諒「汶川縣唐威戎軍製造天王殿記」(李修生 主編『全元文 卷六二〇』)

鳳凰出版社 1998年9月 第1版 第289頁) pp.6262-6263

- (59) 志磐撰「佛祖統紀」大正 卷四九 p.2035c
- (60) 張彦遠;長広敏雄『歴代名画記 1』〈東洋文庫〉305 平凡社 1977
- (61) 『歴代編年釋氏通鑑 卷第十一』卅新纂大日本續藏經 第76冊 No.1516  
「福州府志」「臨汀志」「八閩通志」「長安志」などの地方志にも「天王堂記」  
が記されている。
- (62) 「慧聚寺天王堂記」『欽定全唐文』卷385 pp28-30
- (63) 大正 卷五一 p.2093 a
- (64) 「慧因寺志 天王殿」『玉岑山慧因高麗華嚴教寺志』(杜潔祥主編『中國佛寺史  
志彙刊』第五卷 明文書局, 1980.1) 0065a01
- (65) 天王殿類似表現には「天王院」も史料に類出することを、花園大学大学院生  
の道悟氏よりご教示を受けた。